

小特集・「東京都同情塔」(九段理江、二〇二三年作品) について考える

本作の特徴は、AIが生成した文章と人間が書いた文章がシームレスに混在している点です。作中では、「東京都同情塔」という刑務所を巡る議論が描かれ、その中でAIが生成した架空の「同情論」や「寛容論」が登場します。これらのAIの文章が、まるで人間が書いたかのように自然に挿入されており、読者はどこまでが人間によるものなのか、意識せずにはいられません。また、現代社会における「寛容さ」や「同情」のあり方、そしてそれらが持つ危うさを鋭く問いかけています。AIが社会に与える影響や、人間の倫理観の変化といった現代的な問題意識が色濃く反映されており、その思弁性も評価されています。以上は「生成AI」を使って作成しました。「生成AI」は現在の社会と私たちに多大な変化を及ぼすものですが、「生成AI」を媒介しようとも、文学の表現は表層的な意味で担われるものではないでしょう。今号の小特集では、本作について自由に考えてみます。

「現実」を捉える試みは新しい？

池上貴子

「珍しい」女性の建築家だ。「数学少女」時代にレイプされながら、社会的に訴え(言葉)を退けられた過去があり、言語と意味のズレに偏執的にこだわる。特にカタカナの空疎で脆弱な構造を嫌悪するなど、言葉の「監獄」に陥っている。

罪を犯した人間を収容する新しいコンセプトの高層施設「シンパシータワートーキョー」をデザインした牧名沙羅は、

その沙羅に美しいフォルム(身体)を認められた青年の東上拓人は、自分の母親と同じ年齢の沙羅と肉体関係の介

在しない恋人だ。不遇な母親から二十三回中絶させられそうになった「同情されるべき」出生の過去を持つが、「豊かで恵まれた、ほとんど何でも持っている、前途洋々の、顔が綺麗な若者」という世間のステレオタイプに擬態して、「かわいそうだと同情」されないように、流されるように生きていく。彼はシンパシタワートーキョーを「東京都同情塔」と言い換え、やがて沙羅の設計した「塔」の住み込み職員になった。

シンパシタワートーキョー建設を企画したマサキ・セトは、社会学者で幸福学者だ。彼はこれまで「犯罪者」と呼ばれてきた人や非行少年を、その背景にある出自や境遇やパーソナリティから「同情されるべき人々」であるとし、世界の規範を変革しようと試みる。その一環として、「誰一人取り残さないソーシャル・インクルージョンとウエルビーイング」の実現というコンセプトで、「刑務所」を「シンパシタワートーキョー」、「犯罪者」を「ホモ・ミゼラビリス」と新しく名付け定義した。

人物紹介が長くなったが、九段理江『東京都同情塔』（新潮社）の三人の登場人物は、「シンパシタワートーキョー」すなわち「東京都同情塔」という現代社会の要素を詰め込んだ「バベルの塔」建設と運営に深く携わっている。人物紹介だけでも、この作品がホワイト社会であるべ

きIT社会であるべき多様性社会であるべき……といった複雑な市民の理想社会を詰め込んだ「現代」をできる限り切り取るうとした意欲作であることが窺えるだろう。どの場面にも現代的課題が見出され、読み手に思考させる濃密な機会を与えてくれる。（ただしミシエル・フォーコー『監獄の誕生』を知る者なら、「塔」というメタファーが異端を〈名付け〉、〈健常〉な共同体から〈隔離〉し、囲い込む監視塔であることは予想できるので斬新さは感じられなかった）

読後にまず感じたのは、現代を切り取るという手法への疑問だ。「現代」とは厄介な時間軸で、特に近年は技術開発で「〜以前」「〜以後」と時代が頻繁に分かたれ、瞬間に「現代」ではなくなる。作中に牧名がChatGPTを思わせる生成AI「AI-built」に「自己存在を疑う」ことについて対話を仕掛けるが、作者いわくその解答は執筆した当時にChatGPTが示した解答だ^(注)。実際に作品はAIの解答についての違和感を前提としているが、その違和感は今後五年も続くだろうか。現代的な課題を提出することが作品の隠れたテーマであり作者の試みだとして、誰もが今感じることの切り取るだけではなく、怖ろしく早く過ぎ去るといふ「現在」の特徴を捉えたいうえで、その流れに楔を打つような普遍性が併せて提出されたならば読後感も違っ